

<近世女性史資料（2—2）>

和漢  
繪入 女訓孝經教寿（2）  
——書誌・翻刻——

黄色瑞華\*1  
若林俊英\*2

- 
- \*1 城西大学教授・主任研究員
  - \*2 城西大学女子短期大学部助教授

〈承前〉

凡例

- 1 『和漢繪入女訓孝經教寿』の忠実な翻刻を旨とする。
- 2 使用漢字は可能なかぎり原形のままとし、原本の面影を伝えるようにした。
- 3 漢字のルビもすべて原本のままとした。
- 4 各面の行移りも原本のままとし、丁移り、表裏の別は、「1オ・1ウを以て示した。」

〈上段注記〉(1)

叔梁紇ハ魯國の大夫也これ  
 聖人孔子の御父君にて魯國の  
 昌平郷陬邑と云所に居玉ひ  
 始め魯の施氏の女を妻とし  
 玉ひしに女子九人を産玉へども  
 男子なけれバ再び顔氏の女  
 徴在を娶り玉ふ然るに叔梁  
 紇御年六十四歳なり少年の  
 徴在を妻とし玉ふ事なれば  
 既にはや婚姻の禮に過玉へる  
 御年故徴在男子のなきを  
 歎き尼丘の山神をいのり  
 玉ひしかバ神靈感應まし  
 まして既に徴在懐妊し玉ふ也  
 魯の襄公二十二年庚戌年十一月  
 孔子生れ玉ふ勿論山神へ  
 祈誓の事諸書同意にあら  
 ずと知るべしすべて山野に宿して  
 懐妊せしを野合といふ然るに

孔子御かたち尼丘山に象る因て  
御名を丘と稱たる字を仲尼と

いふ孔子三歳の時に御父叔梁紇  
卒し玉ひ魯の國防山に葬る

其後御母徵在終り玉ふこれを  
魯の五父にほうむる其後軼父と

いふ人の母孔子に告げるハ叔梁  
紇の墓防山にあるよしを誨へ

けれバ再び母を父と共に防山に  
葬玉ふとかや孝子の父母に

事る至徳要道なるべし諒に  
聖人孔子の御信徳ハ日月天の

御恵ミ地の潤育有がごとし  
今萬古の末々迄御徳の廣大

なるをいたゞかざる者として  
上下の輩僧侶とも一人として

もるゝものなし然るに高大の  
御徳の源といふハ御母徵在の

御身の行狀一つより也此事  
深く心得べし顔氏の女徵在

尼丘の山神を祈り玉ふに此時  
すでに天道御感まし〜

— 4 オ

五星精五老庭に降り二龍

家を繞り空中に音樂の  
聲聞へけるとぞ扱父ハ天に象

尊く母ハ地になぞらへて賤き  
事よしハ大法世の庶人も

皆しらざる事なししかれども  
人は尊卑のへだてなく

△孔子御誕生の圖。略▽  
天の高貴きにハ寄る事及び

がたし地の賤しく低にハ必ず  
寄添やすし爰を以て生れて

より成長の間二六時中とも  
母の懐をはなれず晝夜の

わかちなく乳味をたのしむ  
るうれしさいくばくといふことば

なく其子の悦び也其餘の事ハ  
小便大便穢きを厭はず

病時ハ母が身に害失あるにも  
いさゝか思ひ苦勞とせずと

子の息災のミを願ふ事ぞかし  
子として年頃になりかへす〜も

此恩大切にすべき事也これに

— 5 オ

— 4 ウ

男女の差別ハなき事なれば  
親々に能事まつり孝行

すべし又女ハ他の家に嫁し

てハ此書女孝經本文の意

儀を得と合点して舅姑に

孝行ハいふに及はず貞節

ふかく萬事に心を用ひなバ

此世にたましく生れし人といハるゝ

甲斐あるべし然る道理を

能わきまへ平日女の道を守

なバ實父母にハ際限なき

孝心といふべしそれに押變

七去の悪き心がけや又身の

行ひ正しからずして里へ歸ると

いふハ一生女の恥辱これに

過るハなし因て其身の賢

情を肝要とする也其身自

然の天命に還るとも産立

後の世に親々の名を立る程の

君子懐胎を思ひたきもの歟

たゞ鳥獸の憂ひなからん事を  
恐れつゝしむべし時に孔子

5ウ

三歳にて御父叔梁紇終せ

玉ふに衆人の兒と異なり

常の御遊びにハ俎豆の道

具を陳ね禮の容を設

られて身心の行ひありしに

隣家の童子も自然と見

ならひ後々ハ既に近邑迄

然る容儀になれて年を

經るに及んでハはたして賢人

君子ともならせられて忠孝

の道を専らに行ひ天下に

名を顯し今の世といへども

△孔子常に禮容を設て遊び玉ふ圖、孔子の御母。 略

6ウ  
7オ

久しき三千年の後に至り

不易の御徳の名ハ朽ず滅

せず此高大の御徳の源を

知るには外の事にもある

まじく孔子の御母微在の御心

正しきによるへし因て天の

尊く高きよりハ地の賤しく

其近きを大切とするなり  
御祿あらせ玉ふ貴人かたハ

6オ

兼て賢師を抱能道を

學び玉ふ事なれども下の

いやしき者に至りてハその事

逆も及びかたき事に侍れば

せめてハ父母の愛心の恵ミ

天道の命に相應して下

部ハ子を養ひ育る事を

致すゆる先親たる身分に

眞をつくし奢侈と華美

なる事をいましめ万事に不實

なき様に心懸べし女子は

わけて言葉に無用の口を

多分いひならはず差出口

する事なく物事順に

左に右正直にそだて女子

日用の業事ハ此孝經本文

の通りに心懸慎むべし

子を養育するにあまりに

寵愛過して子を悪しく

いたせバ子の不孝ばかりとも

申がたし此ゆるに昔より不孝の

罪ハ親に七分子に三分とも

いへる通言もあれバ鳥獸にも

△ 略 △

おとるべき子の育かたを

せざる心得ハ親の天地へ

御奉公といふもの也誠親との

心明正賢達にあれば其子

必ず孝心なるべし土地よき

田なれば五穀度量ハ満美の

豊作成事疑ふ所なし是に

反して疎忽に子を育るは

舐犢の愛といふて牛が子を

産て育るに舐りまハすが

如くにて子に淫するとやら

いふ是恥を思はぬ婦人愚

母の愛にて成長に至りて

後きハめて不孝不貞の

基也と古人の禁言是に盡す

謹むべし畏るべし

△ 越後国蒲原郡孝女 略 △

過し古代の事とか侍りしに

聞傳へぬ越後国蒲原郡

何村とかやいへる所の農婦

8オ

8ウ

9オ

9ウ、10オ

竹氏の女嫁して三年を

經て子なき故に隣村の

百姓に女子出産有けるを

きつて其儘藁の中より

貰ひし子手前に乳なければ

外人より晝夜ともに貰ひ

乳を得て扱小便大便は

いふに及ばず夫の氣がね朝

夕の心遣ひおほかたならぬ

事の苦勞して二歳まで

育て其後ハヤハらかなる

養物を日夜乳の替りとし

徐やくやしなひ十一二歳まで

成長いたさせしに誠なる

かな父大病にて養生叶

はずして既に秋呼風の

木葉とゝもに散うせしも

あへなき事ぞかし跡にハ母と

娘なりもとより貧なる

世帯なれば日ちん手間

などとりてほそき暮にて

親子命を保ぎしが女

10ウ

十七八歳になりし頃母も

又九死一生也病氣の時節ハ

霜月の初十日頃雪をも

催して一入寒さはげしき

折から病の床に卧時日に

病重りて惱める事見るに

忍びがたくことさら音に

聞へし雪國なれば月を

重ねて日々に幾日となく

降來る雪の積ゆゑに

寒じ烈しく土器などの類ハ

凡寒われざるハなくかゝる

なんぎの折からに貧家の

不仕合故衣類夜具累に

至る迄綿のあつきもなく

唯娘心には十分孝行を

盡すのまことありといへども

母の心に安かるべき看病の

介抱のミ唯明暮母の心の

すこしも安からん事を厭ひ

つかふるのミもとより平日艱

難の暮し故に飯米にも諸

11オ

事に賄なく饘食にはなハだ

乏しく母子ともに朝夕

粥雑炊を漸々に食と

して雪の寒さを徐に

凌ぐといへどもあやうき

露命の有さま也さるを

天の御恵ミこそ有かたき

事にして其年を凌ぎて

陽春のあしたになりけれバ

御領主より孝女と母上へ粮

米三俵錢五貫文下置れ

けるとかや村方の民ハいふ

迄もなく隣郷迄の農夫

此事を悦ざるハなく夫より

して不孝の人男女にかぎ

らず身うち又ハ懇意の人の

異見をまたずして自然と

孝行ハ万徳の根本といふ

自から天命の有かたき

事をしりて御領主の御政

道の正しく御恵の廣大成を

厚く感じ奉らざる民

一四ウ

とては一人もなしこれ

高位にあらせられて

御仁徳の君にましく

孝女下に居て公の御仁

厚を國中におよぼす

事の信義ハまことに母の

本来の實徳なる故なり

さて時候も次第に暖和に

なり雪消になりぬれバ

里近き軒の花も少し色

とり朝日に小鳥の囀るも

實に古人のいへるごとく

其聲價千金とかや母も

喜悅の餘り病も平愈

して一命に無恙有つらんも

誠に御聖道の御蔭と

冥加至極此身の仕合也と

孝女ハ天に九禮し地を拜

せしとなり是程の大徳も

其元來ハ養母の慈愛

娘に残る所なく信義を

盡して育あげたる正心の

一四オ

一四ウ



其深き事を知るべし今の

賤家の婦人とても嫁に

行んとならバ舅姑への孝

行ハ天の命に従ふものにて則

産の双親への孝行ぞと弁へきこと

肝要也三千年の昔にハ

賢人在て今の世には

聖人あらせ玉ハぬといふ

事にも有まじく古言の

ごとく地場能田畑なれば

万の作物木芽も生ち

十分なりとぞ故に母の

徳ハ地にかたどりて陰徳

なり小兒の性心善悪共

これにあるべし天ハ陽徳

にて遙にへだより遠き

事にて父の氣質にハ大方

寄がたし此ゆゑに古聖人の

御母公の御身の行ひは

古書に詳に顯しあれバ

こゝに略す

△孟母。図略▽

孟母織殘したる機糸を

たちきり戒て曰學問の成就すると

せざるハたとへバ如 此と也孟子それより

出精し遂に賢者となりしも孟母の力也

△嵩山、書藏、宋の大儒賢人勤學の圖。

論語にいはいく周の武王の

補佐に天下を亂めて

万民を和し玉ふ賢明の

臣十人ありしといひ傳ふ

實に才徳の揃ひたる

臣は得がたき事なり

唐の堯帝より虞の

舜帝へ世を譲り玉ふ

あいだ才徳の人もつとも

多くして周の代に十人の

賢者ありと聖人の

宣ふも 則 武王自らの

ことばなりその十人と

いふ人くは○太公望、

周公、召公、畢公、榮公、

太公、閔天、散宜生、

南宮适此九人なり扱

一 13 オ

一 13 ウ

一 14 ウ、一 15 オ

一 14 オ

今一人は武王の妾の

うちに邑姜といふ人

勿論賢婦なる故に

これをあげ用ひて

天下の政事を司とらしめ玉ふ

因て十人といふなり

則國を治め家をと

のへ民を恵ミ玉ふとかや

よりに今の世に至りても

中華ハいふに及はず

天が下にその信徳の

名ハ朽ず盡せずいひ

傳へて各其徳を稱せ

ざることなし人々心懸て

慎べきこと也

△周賢評客、農業の圖。略▽

△農家の圖。略▽

孝經庶人章に天の時に

よるといへりこれハ女子たり

とも百姓の妻となりてハ

農業を専らにつとめ

行ふを本意とす地の利に

「16ウ、」17オ

「17ウ

「16オ

つくとハ春稻をうる付

秋になり實のりてかり

をさむ五穀ハ云に及はず

百物の諸菜あるひは

竹木に至るまで天の時

地の利よろしきに合せて

作る事也又織もの縫

ものハ婦女の道なり朝

暮の食物ととのふるに

随分費なきやうに取

はからひ心を付その上に

身をよく慎ミけんやくを

まもり奢ることなく家に

ありてハよく父母に事へ

嫁してハ舅姑につかふ

まつる若少しも煩らハせ

玉ふ事あらバ信心を

盡し身をいとふ事なく

晝夜側をはなれず

介抱する事これ婦や

女の孝行といふべし

委しくハ孝經講釋

「18オ

同和字訓等にあらハシ

たれバこれをよミて庶人の

孝道を盡さん事を

思へバ自然富貴繁昌

なるべし

△御製、高き家にのほりてミレバけふりたつ民の

かまとはにきハひにけり。 略

高貴の御方にぎく敷

御壽命御長盛に目出度

あらせらるゝもいやしき

百姓有ての故なるべし

農民なくてハ天子の

尊ときといへども御長

壽の御調ひましまさず

よしや天命の御壽有とも

五穀の養ひにはなれ

てハ上壹人より下万民に

至る迄只一人も恙なく

安穩に目出度身を治る

ものこれあらし此故に

帝の御詠吟ハ則ち

五穀をはじめ百菜の

豊作にあらむ事を

天神へのり御辛勞

遊バさせらるゝ御心は

天道と其意異らせ玉ふ

事あらず深き御惠の

御徳を士農工商共に

おそらく洩るゝ事なく

嬰兒に至る迄これを

戴ざるものなし廣大

無偏の有がたさを慎て

其身の冥加を得と知り

悪事をなすべからず万人の

難義を思ハざるハ古書に

神儒佛とも忌悪ミ玉ふ

事同意にて必ず三道

ともに憂る所也いましむ

べし恐るべし

△女子手業の圖。略

△蚕養の圖、人皇廿二代雄略天皇の后自ら桑を

もつて蚕をやしなひ玉ふと也。略

農工商の三民はいやしき

ものといへども富家なれば

士の祿あるかごとくに自由

とこのひいかやうにも孝心も

なるべけれども貧困の

世帯にては中々孝行も

心に思ふのミにしてなるまじ

殊に衣食乏しければ眼前

寒暑の凌ぎ朝夕三度の

養育に差つかへうれひ

有りてかなしミたへがたく

あるべし此故に女たりとも

其身相應の業を油斷

なく心かけて父母に

孝養を盡す事肝

要なり

△図略▽

大明太祖皇帝の

御治世に浦江といふ

在所の民同血脉の平人

千餘人先祖より一家内に

數代むつましく同居せしを

太祖皇帝めづらしく思ひ

玉ひ其者を召出して既に

重き御褒美を賜りければ

そのとき后帝へ奏し玉ひ

けるやうハ彼血脉の者千餘

人に及びりしかれば今にも

君に變あらバ必ず後の

殃となるべし是亂國の

もとひ也早く誅し玉へとぞ

帝も此事尤におぼしめし

其者を召かへし御尋

有けるにハ汝か家内千

人にあまり同居いたす事

何ぞ道理の子細有やと

宣ふに平民申上げるには

家を治める同胞の者和合に

相變りなく先祖より年を

經し事ハ只女の言葉を

用ひまじきよしを申傳へし

迄にて此外の事に子細なしと

言上に及びしかバ帝御落

涙にて感じ玉ふと也今民の

言葉を聞我天の罪を

免がれ千人の罪なきを

一 22 ヲ

一 22 ヲ

一 23 ヲ

后の一言にて既に罪に

行ハむと思ひしハ誠に限り

なき畏なりと悔玉ひしと也

△凶略▽

△鳩に三枝の禮あり鳥に反哺の孝あり。凶略▽

鳥ハ飛ぶ事ををしへ

獸ハ走ることををしゆ

とかや人として人の道を

第一にをしゆべきに左ハ

あらずして外事のよろし

からぬ道を親がいたして

見ならハせ成人の後に

子の見ならひたる癖が

則不孝となれば子のミを

あしさまに折檻するは

親たるものゝ心得違にて

本心の慈愛のうすぎと

いふべし世の諺にも鳩に

三枝の禮有鳥に反哺の

孝ありて親鳥へつかへるとぞ

人として鳥にも劣らんや

一 23ウ

一 24オ

一 24ウ

一 25オ

△ときハ御前、清盛公。凶略▽

源家頼朝義經の

母公常盤御前ハ清盛

御身の行ひ悪逆非道ハ

いふばかりなくほしひまゝに

天下の万民を苦しめ玉ひ

仁心なしといへども常盤御前

貞義を捨て清盛のこゝ

ろにしたがひ玉ふ事

誠に有まじき不義

にて諸人これを誹謗

せざるはなし是は理の

當然に聞へし事也全く

此事ハ深き意にて凡

人の及ぶ所にあらず實に

貞心厚く思ふが故也頼朝

兄弟の助命を清盛に

頼みて再應源家の代

として先君のまつり事を

願ひ玉ふ常盤御前の

忠孝也其身の本意に實

けるは一人にして誠に天下の

一 25ウ

一 26オ

庶人たみにくらべては九牛きゅうぎゅうが

一毛いちもうにもたらずとあきらめ

天下てんかの爲ため万民ばんみんの苦くるミを

安やすんぜんとの助意じょいなるべき

事を思たひて大切たいせつの操さほを

すてさせ玉たまふ事は信まことに

これ至德しとく要道ようどうの仁じん廣くわう

大だいなりかくの如ごとき貞節ていせつハ

所謂いハゆる孟母もうぼの德行とくかう賢けんなる

にもおさくおとるべきに

あらず